スワヒリ（Swahili）形成過程と現在のスワヒリ

髙村　美也子*

本論では、スワヒリ（Swahili）という用語に着目し、主に歴史学や文化人類学の先行研究に現れる「スワヒリ」と、筆者がタンザニアのフィールドワークの現場で感じてきた「スワヒリ」の間にある違いについて考察する。

東アフリカのスワヒリ地域は、アラブとの長年の交易により、文化および人びとが混合し、スワヒリ文化が誕生した地域を指す。1世紀に書かれた旅行記や、スワヒリ地域の歴史を扱った多くの先行研究ではスワヒリという用語が多く使用され、スワヒリ文化、スワヒリ人、スワヒリ語という用語は現在の東アフリカ地域においてもごく一般に使用されている。スワヒリ語は東アフリカの広い地域に暮らす多数の民族間のリンガフランカであり、話者数を多くもっている。また、その文化はアフリカとイスラーム文化が混合したもので、エキゾチックな雰囲気を漂わせている。現在では、スワヒリ地域は観光地化され、その独特な文化が世界中から来る観光客を魅了している。しかし、一方でスワヒリとは何か、スワヒリ人とは誰のことを指すのかという問題となると、答えを出すことは難しい。先行研究の多くもスワヒリとは何かを解き明かそうと試みているが、一筋縄ではいかないのである。

本論では、筆者が2000年代から始めたタンザニア沿海部のボンデイ社会におけるフィールドワークの中で触れる「スワヒリ」が内包するものと、さまざまな文献に記述されている「スワヒリ」が意味するものとの違いについて、タンザニア地域が現在に至るまでに経てきた歴史的背景に基づいて考察する。本論の考察からは、とりわけ1960年代の独立以後のタンザニアにおいては、部族語よりも国語としてのスワヒリ語を使用する人口が優勢を占めるものの、「スワヒリ」が何を示すのかは時代とともに「あいまいさ」が増していること、さらに社会主義のもとで国民としての「タンザニア人」に対する帰属意識が強化される一方で、父系でつながるそれぞれの民族に対する帰属意識もまた継承されているという状況が見て取れる。

キーワード

スワヒリ、東アフリカ、交易、アラブ

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　スワヒリ地域
Ⅲ　スワヒリ世界の成り立ち
　1　商人による旅行記
　2　東アフリカ沿岸部におけるプランテーションに関する文献
Ⅳ　スワヒリの概念に関する人類学先行研究
　1　日野舜也
　2　Eastman Carol M.
Ⅴ　ボンデイ社会から考える「スワヒリ」
　1　タンザニアの歴史と社会状況
　2　ボンデイ社会の変化
Ⅵ　考察――スワヒリ文化圏のアイデンティティ

* 南山大学

Ⅰ　はじめに

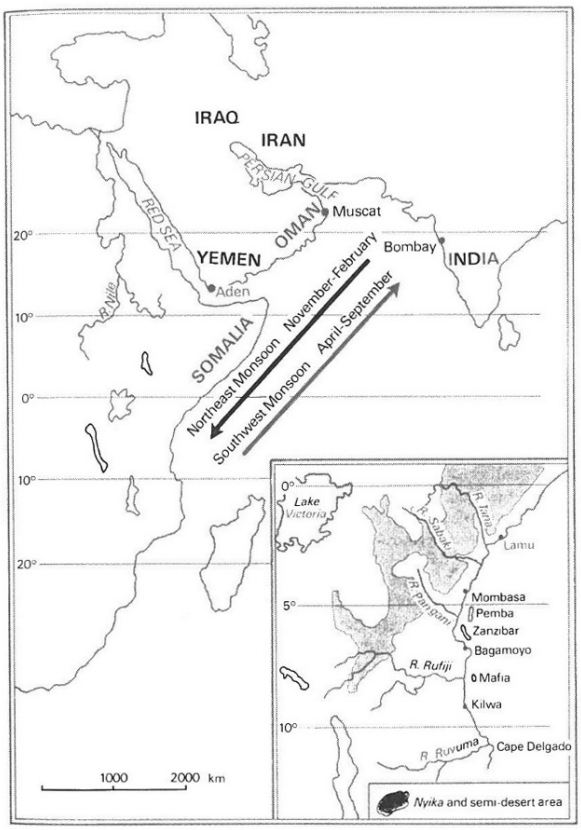
本論では、東アフリカ沿岸部の「スワヒリ地域」、「スワヒリ人」に着目し、本論では、スワヒリ（Swahili）という用語に着目し、主に歴史学や文化人類学の先行研究に現れる「スワヒリ」と、筆者がタンザニアにおけるフィールドワークの現場で感じてきた「スワヒリ」の間にある違いについて考察する。

長年にわたる交易でアラブ・ペルシャ商人が東アフリカ沿岸部に滞在し、文化および人びとが混合したことでスワヒリ文化・スワヒリ人が誕生し、一定の人びとおよび地域がそのように呼ばれてきた。スワヒリ地域と称される地域を含む国家は、ソマリア、ケニア、タンザニア、モザンビークである。他方、筆者がスワヒリ地域の一部であるタンザニア連合共和国で調査していた時、都市の人びとは「ムスワヒリ（Mswahili、単数形のスワヒリ人）」と自称していた。一方、彼らは同じスワヒリ人という言葉を、アフリカ人と同義に使用することもある。例えば、都市の人びとが「日本にアフリカ人は住んでいるのか？」という意味で筆者に質問する際、「日本にワスワヒリ（Waswahili、複数形のスワヒリ人）は住んでいるのか？」と言うのである。一方、沿岸部の農村の人びとは「アフリカ人（Mwafrika）」「タンザニア人（Mtanzania）」と自称し、「スワヒリ人（Mswahili）」と自称することはない。これまで、東アフリカにおいてスワヒリ人およびスワヒリ文化とは何を意味するのかを定義づけたり、分析したりする歴史研究は多く存在してきたが、それらが扱う19世紀以前と現在では状況が異なるように見える。本論の後半では特に、20世紀半ばにタンザニアが西洋列強による植民地支配から独立した後の状況に注目しながら、グローバル経済が進む状況の中で、スワヒリ文化やスワヒリ人はどのような様相を見せているのか、人びとは自身のアイデンティティをどうのように考えているのかを考察する。

Ⅱ　スワヒリ地域

スワヒリ地域とは、約2000年前より東アフリカ沿岸部とアラブ・ペルシャ商人との間で交易がおこなわれ、地元住民とアラブ・ペルシャ人とが交流してきた地域である。

アラブ・ペルシャ商人たちは季節風にのり、アラビア半島から東アフリカ沿岸部までダウ船で到来していた。そして、東アフリカからは別の季節風にのり、インドへと渡航していた（図１）。アラブ・ペルシャ商人たちは東アフリカ沿岸部に滞在し、アラブ・ペルシャの文化と人びとと、東アフリカ沿岸部の文化と人びとが混合してスワヒリ文化が誕生した。



Map 1.1　The western Indian Ocean

図１．季節風を利用したインド洋交易
出典：Sheriff（2002: 9）

アラブ・ペルシャ商人が交易で滞在した場所は都市となり、それらはスワヒリ都市と呼ばれている。交易によって発達したスワヒリ都市は、ソマリアのモガディシオ、モザンビークのソファラ（図２）までの約3,900kmにわたって広がっている。このように、東アフリカのインド洋沿岸部では、交易で繁栄した都市を確認することができる。

交易の範囲は沿岸部のみにとどまらない。アラブ・ペルシャ商人たちは内陸部まで交易の対象地域を広げ、内陸交易ルートも誕生した。よって、東アフリカ沿岸部よりコンゴ東部まで内陸部の交易は広がった。この交易に使用された言語がスワヒリ語である。その結果、交易言語であるスワヒリ語も同時に広がり、現在のスワヒリ語使用地域は、ソマリア南部、ケニア沿岸部、タンザニア、モザンビーク北部、ウガンダの一部、ルワンダの一部、ブルンディ、コンゴ東部に広がっ

図２．スワヒリコースト　髙村作成

ている。

このスワヒリという用語がどのように認識し始められたかという歴史的背景は、旅行記や歴史学などの先行研究から確認することができる。旅行記や先行研究における記述に関しては、次章以降で詳しく述べることとし、ここでは、概要をごく簡単に説明することにする。「スワヒリ」という語は、14世紀に書かれた旅行記『イブン・バットゥータの世界大旅行――14世紀イスラームの時空を生きる』に認められる。ここでは、アラビア語の「沿岸」という意味の「サワーヒル」が「スワヒリ」の語源であると記述されている（家島 2003；Mackintosh 2002）。本論が考察の対象とするタンザニア連合共和国が1964年に建国されるのよりも約500年前には、すでに「スワヒリ Swahili」地域の存在が多くの人びとに認識されていたことになる。14世紀当時、東アフリカには多数の民族が存在し、言語も同様に多数存在していた。それが、1960年以降の各国の独立により近代国民国家が形成され、この地域にはソマリア、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、ブルンディ、コンゴという国家が誕生した。よってスワヒリ語使用圏は、多国家、多文化、多言語、多民族という状態となり、文化、言語、民族は国家を超越して存在する状態となっている。

Ⅲ　スワヒリ世界の成り立ち

スワヒリ世界の成り立ちに関する歴史は、商人による旅行記から読み取ることができる。例えば、紀元1世紀に書かれた作者不明の旅行記である『エリュトゥーラ海案内記』、『イブン・バットゥータの世界大旅行』に当時のことが描かれている。ここではこの2冊を参考にし、当時の歴史を概観していこう。スワヒリ文化の成立は、アラブ・ペルシャ商人と東アフリカの地元住民の間の交易が基盤となっている。そのような事実関係があるのかを、旅行記から確認する。

１　商人による旅行記

⑴　村川堅太郎訳註

1993年『エリュトゥーラ海案内記』中公文庫

当著書は、紀元1世紀半ばに、エジプト生まれの無名の商人が記述した旅行記である。このエリュトゥーラ海とは、字義的には「紅海」を意味するが、今日の紅海は、当時、アラビア湾と呼ばれ、エリュトゥーラ海とはインド洋、ペルシャ湾、紅海を含めての総称であった（村川訳註 1993: 20）。その中で東アフリカへの寄港の様子が第14節から第17節までに記載されている。これらからインドとアラブ・ペルシャ商人と東アフリカの現地の人びととの関係と交易について確認してみる。

第14節：すべてこれらの「向こう側の」取引地[1]にはエジプトからユーリオスの月[2]、即ちエピーピ[3]のころに船が出る。通常アリーアケー[4]とバリュガサの内地からも、これらの「向こう側」の取引地に向けて、その地方の種々の輸出品すなわち麦と米と牛酪とごま油とモナケー[5]やサグマトゲーナイのごとき綿布、また帯やサッカリと呼ばれる蘆蜜が齎される。そして、ある者はわざわざこれらの取引地に向け航海するがまたある者は沿岸航行に際して偶々出会う品々を自分のと引き換えに買い入れる（村川訳註 1993: 109）。

第15節：紅海では夏季に北西風が吹き、冬季には

1　インド
2　7月
3　6月25日から7月24日まで
4　インド西北部
5　インド産織物

東風と東南風が吹くことから、この気象を利用していた。インド洋では4月から10月半にかけて南西の季節風があり、11月から3月には北東風があり、1月が特に強く風が吹き、帰航時期となった（村川訳註 1993: 109）。

第16節：其処から岸沿いの2日の航程の後にアザニア[6]の最後の取引地があり、ラプタと呼ばれ、この名は組木小舟に因んでいる。此処にはまたごく多量の象牙とべっ甲とがある。この地方には体格のすこぶる偉大な海賊どもが住んでいて、銘々その場所で自身をあたかも支配者のように考えている。（中略）原住民と親密でまた婚姻関係をもち土地柄と原住民の言葉とをよく弁えたアラビア人を舵手や使用人に用いている（村川訳註 1993: 111）。

第17節：これらの取引地には主としてムーザ（アラビア半島）特産の槍や小斧や短剣や種々のガラス製品が輸入され、またところによっては少なからぬ量の葡萄酒と麦とが輸入されるが、これは商業用ではなくて原住民との友好関係維持に充てるためである（村川訳註 1993: 111）。これらの場所からアドゥーリ（地名）のものよりは劣等の象牙が多量に出され、またさい角とべっ甲と少量の椰子油とが輸出される（村川訳註 1993:111）。

14節では、麦、米、牛酪、ごま油、モナケー、綿布、帯、蘆蜜といった品々がインドから東アフリカに運ばれたと記述されている。このほか、17節では、東アフリカの人びとはアラブ・ペルシャ商人と交易をしており、その交易における商品のうち、輸入品はアラビア半島から来ており、農具やガラス製品など、鉱物の加工品やガラスの斧、象牙、さい角、べっ甲、椰子油が主な輸入品であったことがわかる。

これらの記述からは、紀元1世紀半ばにはペルシア・アラビア人が季節風にのって、ダウ船で東アフリカまで交易のために往来し、東アフリカとインドとの間で交易がなされていたことが理解できる。そして、ペルシア・アラビア人が東アフリカ沿岸部に居住し、現地の人びとと婚姻し、混合が進んでいたことも明らかである。このころは、まだスワヒリコーストの全体像が確認できるわけではないが、取扱商品、旅行者の立ち寄った沿岸地、人びとの生活の様子が確認できる。

⑵ 家島彦一

2003年『イブン・バットゥータの世界大旅行——14世紀イスラームの時空を生きる』平凡社

歴史学者でイスラーム商業史を専門とする家島彦一は、北部モロッコの港町タンジールに生まれたベルベル系イスラーム教徒イブン・バットゥータによって記述された旅行記から、東アフリカのスワヒリ文化圏の形成について分析している。イブン・バットゥータは、21歳から50歳までのほぼ30年間にわたって、最初の旅の目的地、イスラーム教の聖地メッカを訪ねて巡礼を果たした後、イラク、アナトリア半島、黒海沿岸、ロシア、中央アジア、アフガニスタン、インド、スリランカ、東南アジア、中国と遍歴し、いったん帰国してからも、イベリア半島、サハラ砂漠を縦断してニジェール川流域のブラック・アフリカに足を延ばしている。

当時の東アフリカ海岸、は、スワヒリ文化が形成されていく初期の段階であって、海域世界をめぐる相互の交流関係が緊密化するなかで海岸部にはつぎつぎに交易都市が生まれ、主にアラブ系、イラン系のイスラーム商人たちとアフリカ内陸部から来たバントゥ系の諸言語集団との文化的・経済的な交流が深まることによって、新しいスワヒリ社会が生じた。（中略）イブン・バットゥータは、東アフリカ海岸を包括する文化的・社会的な地域名称として「サワーヒル」というアラビア語を使った、おそらく最初の人物であろう。（中略）スワヒリ文化とかスワヒリ文化圏という場合、単に言語の問題だけでなく、アフロ・アジア諸民族の混血による多民族共生社会、都市的文化・イスラーム教、交易活動などの共通の要素を包摂して文化複合体のことである（家島 2003: 155–156）。

家島によると、スワヒリ文化は14世紀ころから東アフリカで形成されたものであり、その証拠として、イブン・バットゥータがアラビア語のサワーヒルという用語で東アフリカ沿岸部が呼称されることが挙げられ

6 東アフリカ沿岸部を指している。

るという。イブン・バットゥータの旅行記(Machintoshi 2002: 90）には、Maqdashaw（モガディシュ）の町から航海し、Sawahil（サワーヒル、沿岸部）の国を目指し、Kulwa（キルワ）へ行き、Zinj（東アフリカの黒人）の人びとの土地を訪れた、と記載されている。また、当時のモスクが木造であったことが示されていることから、東アフリカでは、イスラームが信仰されていたことが理解できる。

エリュトゥーラ海案内記の時代にはまだ誕生していなかったイスラームは、7世紀初めに誕生している。さらに、イブン・バットゥータの航海時代には、東アフリカまで伝承されている。エリュトゥーラ海案内記の時代とイブン・バットゥータの航海時代を比較すると、アラブ・ペルシャ商人と地元住民との間では、婚姻および文化混合が進み、スワヒリ文化圏は、混血の多民族共生社会となっており、交易で発展した都市的文化をもち、宗教は土着信仰にイスラームが含まれるようになったことが確認できる。

2　東アフリカ沿岸部におけるプランテーションに関する文献

東アフリカ沿岸部の文化、政治、社会を考察する上で、植民地時代やプランテーションや奴隷貿易は、非常に大きな影響を与えたものとして外すことができない。以下では、19世紀におけるプランテーションに関するCooper（1997）とHortonとMiddleton（2000）の記述から、大航海時代以降の東アフリカ沿岸部のスワヒリ地域の様子を確認してみる。

⑴　Cooper, Frederick

1997 *Plantation Slavery on the East Coast of Africa*, Heinemann

プランテーション奴隷について

19世紀になると、東アフリカ沿岸の奴隷は、西半球のプランテーション経済と類似した発展途上地域のプランテーション経済に巻き込まれることになった。大量の安価な労働力をこれらの地域にもたらす必要があったため、奴隷制は新世界と東アフリカ海岸のプランテーション開発の鍵となる存在であった。東アフリカの奴隷所有者の多くはアラビアから来ており、特にオマーンの南東から来ていた者が多かった。他はスワヒリ人であった(Cooper 1997: 3)[7]。

18世紀後半から19世紀初頭にかけて東アフリカ沿岸で貿易が拡大したことで、小規模な沿岸農業がプランテーションシステムに転換するための準備が整った。隣接する大陸側[8]では、スワヒリ人とアラブ人が1840年から1880年代にかけて、多くのココナッツの木が栽培されている中、より多くの土地を穀物栽培地とした。この変革の基礎となったのが、奴隷労働である（Cooper 1997: 6)[9]。

オマーンのアラブ人と東アフリカの貿易の成長について

ザンジバルのクローブ時代の前に、ザンジバルのアラブとスワヒリの人びとは、……果物、キャッサバ、キビ、米などの作物を栽培していた。ザンジバルが輸出貿易に貢献したのは、いずれもココナッツ製品によるものだった（Cooper 1997: 47)[10]。

上の記述から、19世紀の東アフリカにおける奴隷貿易に関しては、現在のタンザニア連合共和国の一部であるザンジバル島、ペンバ島のプランテーションの発展のために盛んになったといえるだろう。それには、様々な要素が絡んでいる。

奴隷貿易を行っていたのは、オマーン出身のアラブ人、ペルシャ人、インド洋沿岸のスワヒリ人実業家である。東アフリカ沿岸部で労働していた奴隷の仕事は主にクローブ、ココナッツ、穀物のプランテーションでの作業であった。プランテーション作業に協力した中心人物が、オマーンからザンジバルに移住したセイド・サイード氏であり、彼の指導の下でクローブの生産と輸出が始まった。その後、ザンジバル島は国際市場へのクローブの重要な供給地となった。そのため、労働力として必要になっていった。19世紀になると、アフリカ内陸部からも奴隷が供給されるようになり、オマーン・ペルシア湾海域のアラビア半島側へ送られるようになった。アラビア半島では、東アフリカ沿岸

7　筆者による日本語訳
8　アフリカ大陸のタンガニーカとインド洋上のザンジバル島、ペンバ島などの島嶼部で構成されているタンザニア連合共和国の大陸側を指す。
9　筆者による日本語訳
10　筆者による日本語訳

から送られた人びとは、家庭内奴隷、めしつかい、めかけ、軍隊、漁撈、航海活動などの労働力として働いていた。また、アラビア半島湾岸やインド洋沿岸部におけるプランテーション作業の労働力ともなっていた（Suzuki 2017）。

当時は、エンジン付きの船は開発されていなかったため、19世紀においても、アラブ・ペルシャ商人たちは季節風モンスーンにのって、インド洋の水路を往復していた。インド洋往来の中で、往路ではアラビア半島経由でアジア産の商品、例えば織物、磁器、ガラス器、陶器などが東アフリカにもたらされ、復路では象牙、金、サイの角、スパイス、黒人奴隷などが東アフリカ産の商品としてアラブにもたらされた。アラブへと送られた奴隷は、農場、鉱山、軍隊、家庭で使用されていた。

これらの記述から、奴隷の所有者は、アラビア人もしくは東アフリカ沿岸部出身のスワヒリ人であることは明らかである。19世紀の時点では、「スワヒリ」と呼ばれる人びとが東アフリカの人びとの間で認識されていることがわかる。

⑵ Horton, Mark and Middleton, John

2000 *The Swahili*, Blackwell publishers Ltd.

スワヒリは、最初の紀元１～1000年以来、アフリカ東部の約長さ2,000マイルにわたる海岸線を占領してきた。16世紀頃になると、その集落は、北はソマリアのモガディシュから南はモザンビーク南部まで、海岸線に張り付くように広がっていた彼らは、ザンジバル島（ウングジャ）、ペンバ、マフィアの大きな沖合の島々、コモロとマダガスカルの小さな群島にも住んでいるが、モーリシャスとセイシェルのさらに沖合の島々には到達していない。19世紀まで、彼らの居住地のいくつかは、海岸から１マイルか２マイル以上離れたところにあった。内陸部でのザンジバル支配の奴隷と象牙の取引の発展に伴い、いくつかの新しいコミュニティがモザンビーク、タンザニア西部、コンゴ東部のはるか内陸に設立されたが、非常に例外的であった。スワヒリは、明確にマークされた境界や明確な中心または資本を持つ単一の自律的な政体を形成したことはないが、独自の文明を持ち、誇りを持つ単一社会および文化的実体であるスワヒリ社会を構成している（Horton and Middleton 2000: 5）。

ホートンとミドレトン（2000）の記述をまとめてみると、19世紀ころには、2000マイルにわたる東アフリカのインド洋に面する沿岸部のみならず、海岸から少し離れた内陸部、島々にも広がり、独自の文明をもったスワヒリ社会を構成していると述べていることがわかる。よって、スワヒリ社会とスワヒリ人の存在は、19世紀当時、スワヒリ人以外の人びとに認識されており、インパクトのある存在であったと読み取ることができる。

Ⅳ　スワヒリの概念に関する人類学先行研究

スワヒリの概念に関する先行研究は、限られている。日本においては、日野（1980）がスワヒリ形成の段階を分析していた。日野は、スワヒリの成り立ちに関する分析を行ってきた。スワヒリの成り立ちには、段階があることを明らかにした。また、イーストマン（Eastman）（1971）も誰がスワヒリなのかという問題を分析している。スワヒリは誰を指すのか、「スワヒリ」の概念の段階がどのように構成されていったのかを検討する。

１　日野舜也

1980年「東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造」『アフリカ社会の形成と展開――地域・都市・言語』富川盛道（編）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 173–225

文化人類学者の日野は、アラブ・ペルシャ系商人や移住民と沿岸バントゥ民の文化的接触を通じて、現在のスワヒリ文化の原型の基礎が形成された時期として、スワヒリの歴史的展開を４つの時期に区分して論じている。

⑴　スワヒリ歴史的展開の４つの時期

第１期である最初の段階は、１世紀～２世紀とその後の15世紀末までのポルトガル到着までである。10世紀頃には原標準スワヒリ語が成立している。

第２期は、ポルトガルの沿岸部支配によって、アラブ・ペルシャとの密着な接触が絶たれ、スワヒリ文化の土着化が進んだ時期である。14～15世紀には、キルワ、モンバサ、パラモガデシオが中心に発展していった。16世紀になると、ポルトガルがザンジバル島やキルワなど、東アフリカ沿岸部を支配下にした。ポルトガルによる支配は、16～17世紀の期間続いた。

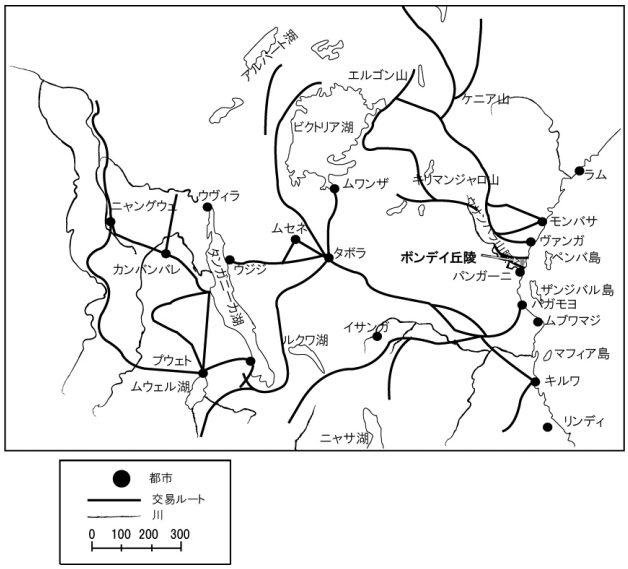


図３．アラブ・ペルシャ商人の交易ルート

出典：Sheriff (2020)

第３期は、オマーン王朝がポルトガル勢力を駆逐して、ザンジバルを中心とする沿岸部支配体制を確立した時期で、アラブ・スワヒリ商人の内陸部への浸透が始まり、スワヒリ文化の地域が拡大した。1840年代には、商人たちが内陸部まで移動し、①バガモヨ→タボラ→ウジジ→ザイール、②マニエマ→カタンガ、③タボラ→カラグェ→ブガンダ、④キルワ→ヴィンジェ→ヤオ→マラウィ→カタンガなどの交易ルート（図３）が構築された。18～19世紀は、オマーン時代（拡大期前期）としている。

第４期は、20世紀のヨーロッパ植民地時代（拡大期後期）を指す。

⑵　スワヒリ拡大期後期

植民地政府は支配体制の確立にあたり、沿岸部のジェヌイン・スワヒリを手先に雇うアラブ人、インド人と共に、スワヒリ人に、下級役人、教師、出先の代理人、警官、通訳、プランテーションの監督、案内人の役割を担わせた。そして、人びとの移動に伴い、イスラームが人びとに受容された。

スワヒリの内陸拡大経路（図３）は、沿岸部→内陸アラブ交易都市→内陸植民地都市→内陸農耕社会→牧畜部族社会の順で内陸に進んでいった。宗教的な要素に注目して分類すると、沿岸部イスラームマジョリティ地域→内陸部イスラームマジョリティ地域→内陸部イスラームマイノリティ地域→内陸ノンイスラーム地域となり、内陸部に行けば行くほど、イスラームが浸透していないことがわかる。

東アフリカ沿岸部におけるバントゥ民とアラブ民との2000年近くにわたる接触は、アフリカ・アジア的な文化複合としてのスワヒリ文化を作り上げた。日野によると、スワヒリ文化とは、都市的生活様式、イスラーム、スワヒリ的生活様式、スワヒリ的物質文化、スワヒリ語などを構成要素とする町文化的文化であるという。

日野は、2000年の東アフリカとアラブ交易の関係から、スワヒリ化の段階を明らかにしたうえで、スワヒリの特徴を次のように分析している。

⑶　日野舜也によるスワヒリの性格の分析

① 人種的特性：スワヒリ文化形成の担い手としてのアフリカ・アジア的なアフリカ人

② 都市性：スワヒリ文化が形成された沿岸部地域の集落の社会的特性は、都市性にある

③ イスラーム：スワヒリ文化を規定する内面的要素。イスラームに基礎づけられた価値体系、観念、法を含む

④ スワヒリ的生活様式：スワヒリ文化を規定する外面的要素。スワヒリ的行動様式、技術、服装、食生活、物質文化を含む

⑤ スワヒリ語：スワヒリ文化を保持し、伝達させる手段的装置

日野の分析では、スワヒリ地域と呼ばれる地域や、スワヒリ人と呼ばれる人びとの特徴を、①アフリカ人ではあるがアジア的でもありアフリカ的である、②都市に居住、③イスラームを信仰、④イスラーム的生活様式をもつ、⑤スワヒリ語を使用する者と捉えている。

２　Eastman Carol M.

1971 “Who Are the Waswahili?” *Africa: Journal of the International African Institute* 41(3): 228–236

イーストマン（1971）は、「Who Are the Waswahili（スワヒリ人はだれか）」というタイトルの論文で、スワヒリの性格を分析している。スワヒリ語話者の中でのスワヒリ人を下記の４項目を基準に分類している（1971: 229）。

① 宗教　　ムスリム、キリスト教徒、その他

② 地理的起源　　自分もしくは両親が東アフリカの海岸地帯で生まれた

③ 氏名　　ムスリム的、キリスト教的、その他

④ 教育　　コーラン学校、ミッションスクール、

その他

ただし、イーストマンは最終的に、「だれがスワヒリ人たちか」という問いに答えることはできないと明言している。また、イーストマンは他にもスワヒリに関して次のような発見をしている（1971: 230）。

① スワヒリ人はスワヒリ語使用者。アジア人もしくはヨーロッパ人はスワヒリ人ではない。スワヒリのオリジナルは誰一人として存在しない。スワヒリ語を第一言語とする人はいない。

② 極端な二極化：ムスリム・アラブ沿岸スワヒリか、ムスリム以外の内陸部の人びとに二極化していた。ただし、今日のスワヒリ人は、ケニアかタンザニアで生まれたネイティブの人びとを指す。

③ 非ムスリムのスワヒリ人は、スワヒリ語を話すムスリムを「アラブ人」と呼ぶ傾向があり、一方ムスリムのスワヒリ人は非ムスリム人を「アフリカ人」と呼ぶ。多くのムスリムはアラブ人の子孫であったり、自らをアラブと称する。そのため非ムスリムは、ムスリムの人びとをアラブ人と非アラブ人ムスリムと混同している。

さらに、イーストマンは、東アフリカの人びとにヒアリングを実施し、その結果から、スワヒリの属性を8通りに区分した（1971: 231）。

① Mwarabu safi　純アラブ人
② Mwarabu　アラブ人
③ Mswahili safi　純スワヒリ人
④ Mswahili ‘Swahili’　スワヒリ人
⑤ Mmasihii wa Pwani　コーストのキリスト教徒
⑥ Mwafrika wa Pwani　コーストのアフリカ人
⑦ Mkristo wa Bara　大陸のキリスト教徒
⑧ Mwafrika wa Bara　大陸のアフリカ人

日野とイーストマンの研究を参照すると、東アフリカの文化、人びとの間には、スワヒリの度合いが高いものから低いものまで、様々な段階があり、グラデーションになっていることを確認することができる。

なぜ、これまでの多くの研究においてスワヒリ文化、スワヒリ人であると確定された場所で、スワヒリ人と呼ばれない／自称しない人びとがいるというような事象が存在するのであろうか。次章以降では、その点を、筆者の調査地であるタンザニア沿海部のボンデイ社会を事例に考察する。

V　ボンデイ社会から考える「スワヒリ」

筆者は2000年代に入ってすぐの時期から現在に至るまで、ボンデイ社会に入り込み、ボンデイの人びとの民族語（kilugha）、民族の文化（utamaduni）、生業（kazi）などを中心に、農村の暮らしを調査してきた。調査した村落は、インド洋に面するタンザニアの沿岸部から40km ほど内陸に入った場所に位置している。沿海部から40km の内陸部に位置しているものの、食文化や経済活動から考えると、ボンデイの人びとは「沿岸部の住民」と見なすことができる。よって、イーストマンのスワヒリの 8 つの区分では、⑤と⑥にあたる。

筆者が民族語の言語認識について調査したところ、30歳代以下はスワヒリ語を優勢言語として使用し、部族の言葉であるボンデイ語の使用に関しては希薄になっている結果（髙村 2006）となった。

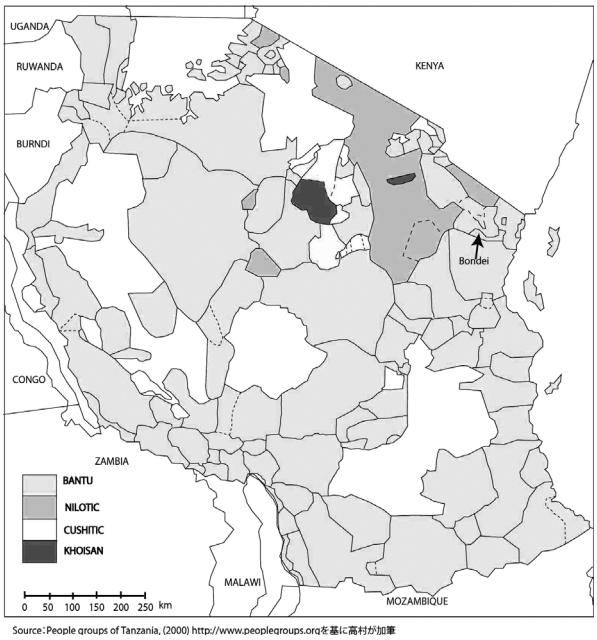


図４．ボンデイ語の使用地域

出典：Ethnologue http://www.ethnologue.com

1　タンザニアの歴史と社会状況

教育面から、タンザニアの言語使用の状況を確認しておく。1961年にイギリス信託統治領から独立し、1964年にザンジバルと合併して建てられたタンザニア連合共和国では、1961年からスワヒリ語が国語化された（Wizara ya Elimu na Utamaduni 1997）。学校教育においては、初等教育における教授用言語がスワヒリ語、セカンダリースクール以上の教授用言語は英語と設定された。つまり、タンザニアでは民族語が教育現場に組み込まれることはない。よって、民族語の使

用は衰退しつつあり、スワヒリ語が主な言語となり、高等教育を受けた者だけが、英語を理解する構造となっている。したがって、タンザニアの教育および社会において使用される言語は、スワヒリ語が優勢となり、公共の場では英語が使用されている状態である。ただし最近では、民族語の重要性が見直され、よりマジョリティに当たる民族の民族語を授業に取り入れている小学校もしくはセカンダリースクールもあるようである。

次に、タンザニアの宗教に着目する。もともと東アフリカ沿岸部を含め、各地域には土着信仰が存在していたし、現在も存在している。そこに、イスラームとキリスト教が加わったことになる。2000年前からアラブ・ペルシャ商人との交易が始まっているが、その間にイスラームが誕生すると、東アフリカに渡来するアラブ・ペルシャ商人たちはムスリムとなり、その信仰を東アフリカまで持ち込んだ。そして、東アフリカ沿岸部の住民、交易で訪れた内陸部の住民にイスラームを教え、また、現地の住民と婚姻することにより、イスラームが東アフリカ沿岸部で浸透していった。ボンデイ社会にキリスト教が伝播したのは19世紀に入ってからである。農作物のプランテーション栽培が植民地地域で広がる中、東アフリカの人びとがヨーロッパ人を受け入れ、東アフリカとヨーロッパとの交易を成功させるために広まった事象の一つが、伝道師によるキリスト教伝道である。さまざまな地域に教会を建設し、伝道師も滞在し、また、西洋教育の学校が建設され、西洋の教育が提供され、現地の子供たちおよび親たちが受け入れ、現地の暮らしに馴染んでいった。そのため、以前、ほとんどの住民がムスリムだった地域でも、現在ではムスリムが50％、キリスト教徒が50％くらいの割合になっている地域もある。結果、現在の東アフリカの沿岸部では、土着信仰、イスラーム、キリスト教が混在している。

独立直前のタンザニアについては、川端（2002）の研究を参照されたい。独立前のタンザニアは、民族主義を形成する活動が行われた。各地域における代表的な民族の同盟が展開された。北西部のスクマ族で構成されるスクマ同盟、北東部のチャガ人組織とキリマンジャロの同盟、北東部のボンデイ中央同盟とザラモ人同盟などがある。

その後、タンザニアの陸側であるタンガニーカは1961年にイギリスから独立し、1964年にザンジバル島と統合して、タンザニア連合共和国が建国された。初代大統領である故ジュリアス・ニェレレは、1967年にアルーシャ宣言でスワヒリ語を国語として認定し、経済政策では、ウジャマー政策[11]と呼ばれる社会主義を打ち立てた。ウジャマー（Ujamaa）とは、スワヒリ語で家族、親族、血族を指す。言語政策と社会主義の経済政策の方針を打ち立てたことにより、脱部族主義が進められた。現在、タンザニアの国勢調査には民族名の記述欄は存在しない。これらの政策が、国民全体の民族意識に大きく影響を及ぼしている可能性は高い。

タンザニアの独立前後におけるスワヒリに着目すると、独立前は、民族主義が中心に動いていたが、独立後、タンザニア連合共和国が建国されるにあたり、経済政策として社会主義が採択され、スワヒリ語による言語の統一が実施され、脱部族の動きが強くなっており、国家が政治・政権・政策において対象とするのは「タンザニア連合共和国」の「国民」であり、政治・政権・政策の対象には、「スワヒリ」という概念は含まれていない。

2　ボンデイ社会の変化

タンザニアの教育と宗教の歴史を上記で要約しておいた。このタンザニア全体の社会の状況は、ボンデイの人びとの農村の暮らしにも変化を与えている（髙村 2006）。

1961年スワヒリ語が国家語と公用語の役割を担ってから、スワヒリ語使用が強化されたことにより、農村部の小学校では民族語であるボンデイ語の使用が禁止されるようになった。使用すると、学校で罰せられることもあった。それにより、多くのボンデイ族が自宅ではボンデイ語を使用していたにもかかわらず、両親も子供たちの教育を優先し、スワヒリ語を家庭内でも使用するようになった。そのため、ボンデイ語は日常的に使用されなくなり、高齢層および村から殆ど出ることのない女性たちのみが使用する言語となっている。その理由は下に挙げる①～⑤の通りである。

①　使用言語はスワヒリ語のみ（中学以上は英語を

11　ウジャマー政策とは社会主義を指し、ウジャマー社会主義という。伝統的なアフリカの土地所有関係と拡大家族の協同労働のうえに成立する共同体の成員同士の相互扶助に基いた社会の建設を目指すという思想である（岡倉 2007: 268）。

使用)。小学校の校舎内では民族語は使用禁止。使用すれば罰が与えられるため。

② 中学校では、英語を使用。校舎内では英語のみ使用可能。スワヒリ語、民族語の使用は禁止されているため。

③ キリスト教の教会ではスワヒリ語、モスクではアラビア語を使用。

④ 市場や店舗など仕事においてスワヒリ語を使用。民族語では他の民族とのコミュニケーションが不可能なため。

⑤ 人びとが集う場、公共施設（病院、銀行、行政等）では、スワヒリ語が公用語。

このように、民族語は農村で劣勢になり、スワヒリ語が優勢となったことは明らかである。

他方、宗教の変化の影響も大きい。タンザニア全体でキリスト教、イスラームの外来宗教がもたらされ、特に沿岸部にイスラームが根付いていったため、ボンデイの土着信仰および儀礼の実施が禁止されるようになった。特に、19世紀にキリスト教が東アフリカに浸透してからは、これまで行ってきた、神が住んでいると信じられているムリンガ山での雨乞いや村で起こった問題の解決のための祈り、神や先祖が住んでいると信じられている村にそびえたつバオバブなどの巨木のふもとで行う祈願儀礼、現世に生きている子孫を守ってもらうための先祖を喜ばす儀礼など、土着信仰のもとで行われてきた儀礼が禁止されている。ボンデイの人びとが最後にムリンガ山に登ったのは、70年ほど前と言われている。

さらに、文化継承の衰退には、インフラ普及による生活の変化も影響している。ボンデイの村の電気の普及は、タンザニアの中でも非常に遅れていた。筆者は2006年からボンデイの農村にフィールドワークで滞在しているが、当初は電気が通じていたのは村の4分の1の家庭のみで、全く電気が普及していなかった地域もある。しかし、近年、電気が農村に届くようになると、テレビが普及し始め、子供たちはテレビに夢中になり、携帯電話の充電ができるようになったため携帯電話およびスマートフォンも広がり、または学校の宿題をしたり、娯楽や学校教育強化のために、夕食後に行われていた高齢者からのお話を聞く行為がほぼ消滅し、これまで行われてきたボンデイにまつわる伝統的な話を聞く機会が失われてしまった。

学校教育の現場で民族語の使用が禁止され、家庭内で高齢者から話を聞く機会が失われたことで、例えばことわざのみにボンデイ語を使用したとしても、ことわざの書き方が特殊であるため、意味が理解できない若者が多くなってしまった。スワヒリ語とボンデイ語は同じバンツー諸語であるため、比較すると文法は似ている。しかし、やはり異なる言語であり、語彙も異なるため、ボンデイ語を知らない人にとっては理解できないか、ある程度理解はできても、心にまで届かない事態になっている。そのため、若者たちはボンデイ語でも分かる箇所を、脳裏でスワヒリ語に「翻訳」して理解しているようである。

このように、言語や民族の行事はスワヒリで統一化される傾向にあり、民族間では言語バリアが低くなった。かつ、スマートフォンが使用できるようになると、民族、国籍の枠を超えたコミュニケーションが可能となったことにより、ボンデイの民族的な実践は希薄化することになった。一方で、SNSが農村部の人びとの間にも普及したことで、逆にボンデイの文化を積極的に紹介したり、それを「わざわざボンデイ語で」記載し投稿する村民も表れている。表面的にはボンデイの言語や文化を否定していても、心の中では、大切に思っている人がいるということの表れなのかもしれない。

実践が減少している文化は多いが、そのまま継承されている文化もある。ボンデイに継承されてきた文化の代表的な実践は、子宝祈願儀礼（髙村 2019）と埋葬文化（髙村 2019）である。子宝祈願儀礼とは、ボンデイの既産女性のみが参加できる結婚前の新郎新婦のために行う儀礼である。この儀礼を通して、ボンデイの女性たちは、ボンデイの女性同士の関係性を強化し、その後はお互いを助け合う仕組みを構築している。ボンデイの埋葬文化とは、ボンデイの子孫は、実の父の父方の墓地に埋葬されることである。男性の場合、新たに墓地を作る場合はあるが、基本的に実父の父方の墓地に埋葬される。男性のみならず、女性も同様である。たとえ婚姻により婚姻先で長年暮らしていても死去した際には、女性は実父の父方先祖の墓地に埋葬される。それにより、先祖との関係性が永遠に継続され、また、自分の出自および先祖をたどることができるのである。ボンデイの人びとは、イスラームかキリスト教のどちらかを信仰し、土着信仰に対する実践は劣勢になっている。しかし、死後の文化である埋葬文化はそのまま継承されており、土着の文化が外来宗教を超えた基盤となっているといえるであろう。

ボンデイは政治にも積極的に参加し、独立前には、

ボンデイ中央同盟（Bondei Central Union）を1498年に結成し、1949年に民族主義的組織と連携した実態がある（川端 2002: 230）。ここからでも、ボンデイは、タンザニア北東部に位置するタンガ州において、代表的な民族の一つといえるだろう。当同盟が存在するこのころは、まだ民族主義的であり、各々の民族単位で活動が実践されている。その後タンザニアが独立すると、ボンデイの地域でもスワヒリ語が優勢言語に変化している。他方、父系社会であるボンデイは、継承されてきた慣習および文化、特に墓文化は、そのまま継承されている。

Ⅵ　考察――スワヒリ文化圏のアイデンティティ

これまで大航海時代前の旅行記、プランテーションが広がった大航海時代、独立前後のタンザニアの政策等の文献から、スワヒリとは何を表すのかという理解に関する変化を見てきた。

そこからスワヒリの概念が、地域名、スワヒリ語話者、アラブ人との混血、非アフリカ人と、様々な意味を含む点を読み取ることができた。これらから、なぜ「スワヒリ人」であることは人びとのアイデンティティにはならず、人びとは自らの帰属を説明する時、民族名もしくはタンザニア人という呼称を用いるという状況が優勢になっていったのかを考察する。

その要因は、複数あるだろう。筆者は要因には、歴史、政治、文化が関係し、特に、歴史の中での住民の分類、独立後の政策、継承されている文化の3点が大きくかかわると考えている。

歴史の中でのスワヒリについて再確認する。国家未形成時代である紀元前未確定年～紀元15世紀ころの商人や探検家たちによる旅行記には、貿易開始時期のギリシア人・アラブ人・ペルシャ人が「ラプタ（場所不確定）」「アザニア（東アフリカ）」「サワーヒル（アラビア語で沿岸）」と明記しており、その時すでにアラブ・ペルシャ人の存在および交易の実態が確認され、イスラームが誕生したのちには、イスラームが浸透し、人びとの間では混血が始まっており、スワヒリという認識が示され、この時期がスワヒリ形成時であると分類されている。この時期は、「沿岸」の人びとという意味合いが強い。

その後、16～17世紀ころにかけてポルトガルが東アフリカを支配した。ポルトガルの時代はさほど長く続かず、18～19世紀にはオマーンがタンザニアの島の一つであるザンジバル島を支配し、王朝をつくった。その時代には、交易がますます盛んとなり、奴隷貿易、プランテーション開発が行われるようになった。そして、奴隷を扱うアラブ・ペルシャ人は、東アフリカ地域の土着の人を「スワヒリ人」と呼んでいたことが明らかになっている。

ドイツ、イギリスによる植民地時代になると、19世紀後半～20世紀中旬の植民地時代になると、東アフリカの広い範囲にスワヒリ語が拡大し、奴隷制度は終了し、多くのアラブ人たちがタンザニアから撤退していった。残っているアラブ系の人びとは、バントゥ系の現地の人びとと結婚している。

このように、数千年の時間をかけ、アラブと東アフリカの住民が混合してゆき、スワヒリという概念が広がってきたことが分かる。しかし、スワヒリという地理的、人的範囲はグラデーションになっており、歴史的に、スワヒリには境界線を引くことができる特定の領域がなかった。そして、沿岸部の住民は、このスワヒリの概念のあいまいさを駆使し、時代や社会的事象によって、自らのアイデンティティを表明する際に民族名かスワヒリ人という呼称を使い分けていた実態が確認できた。

次に20世紀の各国独立後の政策をまとめてみる。1960年代に東アフリカの各国は独立し、国民国家が形成された。本論文の舞台であるタンザニア連合共和国も、1964年に建国されている。国家形成および政策がスワヒリ文化に与えた影響は大きいと考えられる。とりわけタンザニアは初代大統領により社会主義が推進され、国民や民族を統一するためにスワヒリ語の国語化、脱部族化が実施された。スワヒリ語は全国で使用され、2021年現在では、高齢者を含め、ほとんどのタンザニア国民がスワヒリ語を話すことが可能である。一方、スワヒリ語を国語とすることにより、約130ある民族の意識は希薄になっていった。そのため、筆者の調査対象者であるボンデイの若年層の中には、自分のアイデンティティを「ボンデイ人」ではなく、「タンザニア人」と語る人びとが出てきている。一方、ボンデイの居住地は、いわゆる「スワヒリ文化地域」と呼ばれる地域に位置している。しかし、誰一人、自ら「スワヒリ人」と称する人は存在しておらず、ボンデイ人かタンザニア人の2つの属性のうちどちらか、あるいは両方を用いて帰属意識を表明することが確認できた。

地理的環境も大きく影響をしていることが明らかに

なった。スワヒリは、都市的文化をもっていることから、以前アラブ・ペルシャ商人が滞在した現地域では、現在も「スワヒリ」という言葉を沿岸部の都市住民は使用している場合もある。しかし、現在、30歳以下の人びとの間では、都市でも農村でも自らを「スワヒリ人」はまれであり、ほとんどの人びとの自分の帰属意識は民族名もしくはタンザニア人であった。

タンザニアの人びとは、なぜスワヒリ人ではなく、民族名かタンザニア人と自称するのであろうか。そこには、様々な文化的・社会的条件があると、現場およびこれまでの調査の結果から筆者は考えている。その一つが父系社会である。

タンザニアの多くの民族社会は、父系社会である。そのため、人びとは父系の先祖が誰なのかは明白である。例えば、以前は「スワヒリ人」と呼ばれていたアラブとの混血の人びとは、現在では、アラブ人と呼ばれている。非混血で沿岸部に居住している人びとは、父方の先祖の民族が帰属民族となる。この父系社会というシステムが、スワヒリ人という呼称が排除していると考えられないだろうか。

そして、タンザニアが独立した際、社会主義政策を推進したことも関係していると考えている。植民地化される前は部族主義であったため、当時、各々のアイデンティティを表明する際には、「ボンデイ人」「スワヒリ人」等、各民族名を示すことができた。しかし、独立後は社会主義となり、「タンザニア人」の認識を持つことが促進され、言語の面でも「スワヒリ語」が国語となり、民族の言葉の使用は減少した。しかし、国語がスワヒリ語であるが、約130の民族は各々の言語をもつため、国語および民族語と国民および民族との認識が統一されないのではないだろうか。

最後に、現在でも継承されている文化について検証してみる。多くのタンザニア国内の民族は父系社会である。事例で上げたボンデイ社会の文化実践から考察すると、土着信仰の継続、埋葬文化は、ボンデイのアイデンティティの基盤となっていると考えられる。前述したが、ボンデイの埋葬文化は、死去すると男女ともに父方先祖の土地に埋葬される。それは、婚姻先で死去した娘も同様である。それは、生前から自分の死後には、自分の父および父方の先祖の元に行くことを自覚しており、自分の死後の行先を把握していることで、安心感を持っている。外来宗教の影響により土着信仰の実践が減少しているにも拘わらず、当文化は継続されている。そのため、生前から先祖とのつながりを認識していることで、「ボンデイ人」という帰属を強く意識する機会は多いと考えられる。

以上の通り、タンザニア連合共和国建国後の社会主義、脱部族主義、言語統一、外来宗教の浸透により、「タンザニア人」という認識が促進されている。一方、父系社会、土着信仰および文化の継承に基づき、民族意識は継承されている。そして、「スワヒリ文化」および「スワヒリ人」を含むスワヒリの概念は「あいまいさ」を伴って時代を経過してきた。特に独立前後の政治・政策には「スワヒリ」は、人びとの区分には使用されてきていない。スワヒリ文化圏と分類される沿岸地域の農村であっても、父系社会を基盤とする土着の文化が優先的に継承されている。それが帰属民族もしくは自己アイデンティティを決定づけている大きな要素の一つではないかと考えられる。

参照文献

（日本語文献）

家島　彦一

2003 『イブン・バットゥータの世界大旅行——14世紀イスラームの時空を生きる』平凡社。

岡倉　登志

2007 「「アフリカ社会主義」とその挫折」『ハンドブック現代アフリカ』明石書店、267–288。

川端　正久

2002 『アフリカ人の覚醒　タンガニーカ民族主義の形成』法律文化社。

作者不明

1993 『エリュトゥーラ海案内記』村川堅太郎（訳註）、中公文庫。

髙村　美也子

2006 『スワヒリ語圏ボンデイ族のことわざに関する言語人類学的研究』名古屋大学提出論文。

2014 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書第11　スワヒリ農村ボンデイ社会におけるココヤシ文化』名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室。

2019 「結婚式におけるキシミカントゥイ儀礼——タンザニア、ボンデイ社会のエスニシティ」『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』7: 119–124。

2019 「ボンデイ社会における女性の死後の移動」『人類学研究所　研究論集』7: 141–153。

2021 「タンザニアの民族語・ボンデイ語のゆくえ——ボンデイの母語への意識変化」『スワヒリ＆アフリカ研究』32: 55–66。

日野　舜也

1980 「東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造」『アフリカ社会の形成と展開——地域・都市・言

語』富川盛道（編）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp. 173–225。
2007 『イスラーム圏アフリカ論集Ⅰ　スワヒリ社会研究』嶋田義仁、中村亮（編）、名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室。
法務省
2009 『タンザニア 2009年国別人権報告書――法務省』https://www.moj.go.jp/isa/content/930002813.pdf（2022年4月15日閲覧）

（外国語文献）
Ares, W.
1975 "The "Waswahili": The Social History of an Ethnic Group" *Africa: Journal of the International African Institute* 45(4): 426–438.
Cooper, Frederick
1997 *Plantation Slavery on the East Coast of Africa*, Heinemann.
Eastman, Carol M.
1971 "Who Are the Waswahili?" *Africa: Journal of the International African Institute* 41(3): 228–236.
Ethnologue Language of the World
2009 http://www.ethnologue.com（2012年7月28日閲覧）
Mackintosh-Smith, Tim
2002 *The Travels of Ibn Battutah*, Picador.
Horton, Mark and Middleton, John
2000 *The Swahili*, Blackwell publishers Ltd.
Sheriff, A.
2002 *Slaves, Spices & Ivory in Zanziibar Integration of an East African Commercial Empire int the World Economy, 1770–1872*, Oxford.
Wizara ya Elimu na Utaamaduni（教育文化庁）
1997 *Sera ya Utamaduni*, Wizara ya Elimu na Utaamaduni http://www.tzonline.org/pdf/serayautamaduni.pdf
Suzuki Hideaki
2017 *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean*, Palgrave Macmillan.

『人類学研究所 研究論集』第12号（2023）
Research Papers of the Anthropological Institute Vol.12 (2023)

Development of “Swahili” as a Term and its Current Role

Miyako TAKAMURA*

This paper focuses on the term “Swahili” and discusses the differences between Swahili as it appears in previous studies, mainly in history and cultural anthropology, and how it is perceived by the author in fieldwork in Tanzania. The Swahili region of East Africa refers to the area where the Swahili culture emerged from a mixture of cultures and peoples resulting from years of trade with Arabs. This term is used extensively in travelogues written in the first century and in many earlier studies discussing the history of the Swahili region and references to the Swahili culture, people, and language are still used in East African region since Arabic people started trade in inland of East Africa. Swahili is lingua franca of many ethnic groups in a large area of East Africa, which has large number of Swahili speakers. The Swahili culture is an exotic mixture of African and Islamic cultures. Today, Swahili region and its unique culture have become a tourist destination, attracting visitors from all over the world. Despite that interest, it is difficult to clarify who and what Swahili as a term means and who Swahili people are. Many previous studies have also attempted to clarify what “Swahili” means, but they have not clarified on it.

In this paper, the author will discuss what “Swahili” means based on her fieldwork in the Bondei communities in coastal Tanzania, which she began in the 2000s and how Swahili, as a term, is described in previous research papers. The differences are discussed based on the historical background that Tanzanian region has gone through to the present day.

The discussion in this paper, it can be understood that, in Tanzania after independence in the 1960s, although the number of people who use Swahili language as the national language is predominant rather than tribal languages, there has been increasing ambiguity about the meaning of “Swahili”, and that, the sense of belonging to citizen as “Tanzanian” as has been strengthened under socialism, but same time, the sense of belonging to each ethnic group are linked by patrilineal descent, and also has been inherited.

Keywords

Swahili, East Africa, Trade, Arab

* Nanzan University